

第24期 三田健太

24期 1番／山崎雄二 (PR)
2番／川合芳男 (HO・副将)
3番／村上光 (PR)
6番／三田健太 (FL)
7番／矢野幸隆 (FL)
11番／伊藤茂美 (WTB)
12番／新井一孝 (CTB・主将)
14番／橋口正秀 (WTB)

[記念誌のために全員集合]

24期は団塊最後の世代だ。1クラス50名で9クラス。1学年454名だった。戦後のベビーブーマーは、つねに満杯の教室と厳しい競争のなかで育った。進学しかり、女性獲得しかり、受験もナンバもたいへんだっただの。われわれの2年後には高校進学に学校群制度が施行された。ところで、当時の千歳高校は、都立高校のなかで1、2位を争うレベルで、ライバルは日比谷高校だった。残念ながらというべきか、うれしいことにというべきか、学力ではなく、ラグビーの話だ。

1995年12月1日(金)、下北沢・魚真に千歳高校ラグビー部(正式にはラグビー班、だれもそうはいわなかったが)24期8名が集合。全員が顔を合わすのは、じつに卒業以来27年ぶりだった。テーマは、「50周年記念誌」対策—24期は、受験準備という名目で、3年の5月までしか活動しなかったため、OB会にも入れてもらえず、3年のことだけ書けといわれても困るのだ。それなら1、2年のことを、といっても、すでに長い年月を経て、ひとりひとりの記憶には、いくつかの断片が残るのみで、まとまりがない。そこで、その断片をつなぎ合わそうということになったわけだ。とくに、この手のあまり役立ちそうもないことをよく覚えて

いる川合を頼りに。

[入部経緯]

自ら進んで入部したいわば“確信犯”は、新井と伊藤くらい。二人とも足が速かったし、運動神経も良かった。新井は、陽気で、プラス思考の図々しい性格。伊藤は、飄々として、泣き言をいうことがなかった。

村上、川合も自発的に入部したが、村上は、やめそうになるのも早かった。悩み迷う性格なのだ。川合の場合は、練習を見ていたところ、宮本さん(22期)に着替えてこいといわれ、そのまま入部した。本人は背が低くずんぐりした自分の体型に合うのはラグビーだと確信したという。

そのほか、橋口、矢野、三田、山崎は、ラグビー部伝統の勧誘法に引っ掛かって入部した。矢野は、走り高跳びをやりたいかったらしいが、ネコなで声の佐々木さん(23期)に、1回だけ練習出てみるといわれ、出たのが運のつきだった。三田は、すでに生物班に入り、ハツカネズミの世話に明け暮れる毎日のなかで、ふとした心のスキに、高木さん(23期)の、今日だけ試しにやってごらんよ、という甘い囁きが響き、誘いにのってしまった。

練習後の円陣ミーティングで、入る気なんてなかったのに入部したと決めつけられても、だれも逆らえなかった。新入生にとって、ラグビー部の円陣は、ヤクザにとり囲まれた恐怖と同じだった。先に入った者は、新たな小羊が1日だけのつもりで練習に出てくると、あざけりとあわれみと仲間意識の混ざった複雑な気持ちで迎えた。

しかし、翌年、同じ手法で勧誘し、つぎつぎ落ちていったなかで、ひとりだけ円陣のその場で、「あっ、ウソだ!インチキだ!」と逆らった奴がいた。信州からやってきた、

相撲部出身の地形(25期)だ。結局、千歳には相撲部がないのでラグビー部に入部したが、相撲で鍛えた摺り足を使ったどうにも変なランパスをしていた。

[ボール磨き]

1年は、入部すると、昼休みはいそいで食事を済ませ、部室へ集合しなければならない。ボール磨きをするのだ。最初は信じられなかった。ツバと女のナイロンストッキングで磨くなんて!家からねえちゃんやかあちゃんの古いストッキングをもらってこいと先輩からいわれ、仕方なく持っていった。矢野は姉貴のものだからまだいいが、橋口や三田は情けないことにおふくろのストッキングを持ってきた。新井と矢野は、ボール磨きをよくサボったが、村上はボール磨きの達人だった。というよりも、他のだれよりもツバがベッベッと不思議なほどよく出たのだ。こびりついた泥もいっしょにピッカピカに磨き上げる技を持っていた。

[ロード]

1週間のうち、日曜と水曜が休み。日曜によく試合があった。みんな試合は大好きだったが、練習はおおむね嫌いだった。火曜には4-5kmのロード練習があった。インターバル走をするが、矢野、川合はこれが好き、村上、山崎は大嫌いだった。1年のときは、先輩やOBにジャージの肩をつかまれ全力で走らされると、つんのめりそうになり、死ぬほどつらかった。ロードでの佐藤さん、八代さん(ともに23期)は、ほとんどケダモノのようだったと、みんなが述懐している。山崎が遅れると、それを待つ間休めるのでみんな助かった。1年の山崎は90kg超の体重を維持する、筋力もスピードも心肺機能もまだ備わっていなかったのだ。山崎が、集団にやっと追いついても、休

みなしでまた走らされるのだから、気の毒だった。村上は、きつかったがあれで体力がついたといま振り返る。こういうタイプは、シゴキOBになりやすいかもしれない。

[OB]

20期がよく練習を見に来てくれた。スカパンさん、インマツさん、カワグチさん、カノウさん、そしていちばんよく来たエイサクさん。名前は耳で覚えたのでカタカナ書きした。スカートみたいなパンツをはいたスカパンさんを本名とはだれも思わないが、矢野は、インマツさんを、本当の苗字だと思っていた。矢野は、そういう間の抜けたところがあり、シンスケさん(8期か10期くらい)も苗字だと思っていたという。

橋口は、インマツさんとそれほど親しく接したわけでもないのに、うつされたと思いついでいた。ポリポリ腿の付け根あたりを搔いていたら父親に見つかりヨーチンを塗られたそうだ。いまでもその跡には色がついていて、それを見るとあの頃の日々を思い出すという。カトンボのような長い手足をした橋口が股を搔いている姿を想像すると、なんだか気持ち悪い。

エイサクさんは、ある時期毎日のように現われた。親し気に1年に近寄ってきたが、みんな逃げ回っていた。抜群の運動能力の高さと冷酷なシゴキもさることながら、生卵をカルシウムであるからといって殻ごと食べてしまったり、臭いしマズいだれも食べられなかった合宿のモツ煮込みを鍋ごと平らげたり、人間離れした動物性がこわかったのだ。

練習にやってくると、校庭でスッポンボンになって着替えをするので、中込さん(23期)が女生徒の目もあるか

らやめてくださいと頼んだほどだ。授業の5時間目くらいになると、もうジャージに着替えてひとりで校庭でバントなんかしているのが、教室の窓から見える。なんとも憂鬱な気分になったものだ。結果的につかまったのは、またもや橋口だった。三田もつかまったが、20期にいた女のいところ(アオスジというアダ名—いつも怒って青筋を立てていた)の名をだすと、扱いが丁重になり、なんとか逃げ切った。橋口は、インターバル走、フィールドイング、セービング、タックル…、徹底的にしごかれ、竹ザオで尻をバシバシ叩かれた。

[ナンバとケンカ]

当時は、IVY全盛でVANやJUNがはやり、大橋歩のイラストの平凡パンチが必読だった。1年のとき、まず矢野が、佐藤さん・申込さん(23期)に、新宿ヘナンバに連れていってもらった。のみ込みの早い矢野は、すぐに新井と組んで、毎週土・日に盛り場に繰りだすようになった。ブレザーを着て、ボタンダウンシャツにニットタイという格好だった。矢野は三田も連れていったが、自分がいいほうを取り、三田にひどいほうをあてがった。そういうやり方は、佐藤さんから学んだ。矢野は、土曜の練習が終わると、歌舞伎町に行くようになり、地回りの“オジさん”にかわいがられたという。

矢野は、中学のころ番長だが副番長だっただけに、盛り場でもラグビーの試合でも盛んにケンカをして、試合ではよく退場になった。とくに、都立1、2を争うライバルの日比谷には、トイメンに同じような性格の奴がいて、スクラムを組んでは殴り合いをしていた。その二人は、ボールはもうよそへ行っているのに、試合に関係なく取っ組み合

いをしているのだから、退場になっても当然だ。それが毎度のことだった。

しかし、矢野には感激屋の側面もあった。OBが作ってくれた新しい試合用ジャージをレギュラーとして受け取ったときには、思わず涙ぐんだ。また、憧れだった秩父宮ラグビー場に同期の新井が立教の選手として出場した際には、感動のあまり涙をポロリとこぼしたりもした。

[試合]

「オレが右に抜けるとだれが左に入って…」とディテールには詳しいが、27年経って、24期のだれひとりとして、多くの試合の全体を把握している者はいなかった。「そんなものはスコアブックが残っているだろう」と意見が一致したが、後輩諸君、残っているだろうね。

公式戦は、春の関東大会予選、夏の終わりの国体予選、秋の全国大会予選、年が明けた冬の新人戦と4つあった。保善、京商、大東文化、国学院久我山、国士館、日大二高などと戦ったが、どの公式戦か意見が錯綜し、わからない。当時トップの保善との試合は、ボロ負け。止まらなくて、やられっぱなしだった。当たりが強いというわけではなく、ウマすぎるといった感じ。ゴツくて強かったのが京商。久我山には惜敗。(矢野はこの試合でもロッカー室で、指輪をしていた久我山の生徒3人をナマイキだと脅している)印象に残っているのは負けた試合ばかりだが、国士館には勝っている。しかし、これはスクラム内のちょっとしたトラブルのせいでみんなの記憶に残ったからだ。

2年の合宿では、前年の栃木代表の宇都宮工業に勝ち、栃木ならオレたちだって全国大会さ、と有頂天になっていたところ、作新学院にはボロ負けし、大きな口は

きけなくなっていました。

戦績のベストは、2年の全国大会予選、東京ベスト16だろう。東京の数十校のなかでは上位だった。城北のグラウンドで本郷高校とやって僅差で負けた。勝てば(ベスト8になれば)秩父宮に行けた。FB中込さん(23期)が前半で早くもツブされ、14人で戦ったのだ。

負けたそのグラウンドの脇で、円陣を組み、大勢いたOBに促され、部歌を歌わされた。「愛校の意気天をつき〜」
— 川合は、恥ずかしかったという。そりゃそうだろう。

— それが24期最後の公式戦だった。

[合宿]

24期は、栃木県・宇都宮市の丸治旅館での合宿に2回参加した。大手商社に勤める村上は、いまだに「栃木」「宇都宮」方面には向かいたくない、という。そういう繊細で執念深いところのある性格なのだ。

三田は、丸治旅館からもらってきた益子焼きの湯呑みで、いまだに苦い茶を飲んでいる。合宿は、OBの寄付のおかげで、他のクラブに比べて食事だけは豪華でボリュームがあったようだ。しかし、これがまたシゴキに通じる。激しい運動のあとでは、ドンカツやらステーキがいくら並んでも、のどを通るものではない。山崎は、OBに無理やり食べさせられ涙を流していた。

こんなこともあった。OBに、1年(24期)がタックルの練習で絞られていた。当たりが弱いので、位置が高いのと怒鳴られつづけた。OBが不敵な面構えの2年の秋さん(23期)に、おまえやってみろ、と指名した。秋さんは、ものすごい当たりでタックルマシンを1発でブッチぎって壊してしまった。タックルマシンは1本しか持ってきていなかっ

た。秋さんはふだんは物静かでタラタラしていたが、気が入ると想像を絶するほどのパワーを出すのだ。1年は、みんな顔を見合わせて心の中で「ヤッター」と快哉を叫んだ。が、以後タックルの練習は生タックルになり、全員絶望し、秋さんのパワーを恨んだ。

[大先輩]

合宿の中日くらいになると、相馬さん(4期)、全さん(7期)が差し入れと練習にやってくるのが恒例だった。ともに優しく、気前のいいOBだった。相馬さんは、着いた日の午後1回だけ練習に出て、そこで使った真新しいスパイクやジャージーを、だれかサイズが合う奴にやる、といった。結局、山崎がもらうことになったが、シゴかれてばかりで地獄の苦しみを味わっていた山崎にとっては、大きな励みになった。全さんは合宿の練習風景を8ミリで撮影してくれた。相馬さん・全さんの世代と、形だけではあっても一緒に練習したのは、われわれが最後くらいではないか。いまでも、中村屋の肉まんや月餅、モランボンの焼肉を食べ、サクラチトセを単勝で買うという伊藤のような熱心なファンもいるのだ。

[グラウンド]

新井は、千歳のグラウンドの土の色が忘れられないという。雨が降れば水たまりができたりしたが、端を大きく回れば1周500メートルは優にある開放的で大きなグラウンドは、みんな結構気に入っていたものだ。中心部は、野球、サッカー、陸上、ラグビーなどが、譲り合って、というか奪い合って使っていた。いま、千歳のグラウンドは、見る影もないという。ゴールポストが片方しかない小さなグラウンドで、砂を入れた白茶けた色をしているそうだ。「こんなグラウンド

になっちゃうのかって、さびしい感じがする」と、ふけゆく
下北沢・魚真の夜、新井は、柄にもなく感傷的になるの
であった。

[24期ギネスブック]

- ・足の速さ…1位伊藤(11秒台) 2位新井(12秒台)
- ・マラソン…1位伊藤 2位川合
- ・返事がいい…1位橋口 2位宮本さん(22期)
- ・ピフテキ…1位橋口 2位伊藤
- ・コンバウト…1位新井 2位村上
- ・体重…1位山崎 2位村上
- ・身長…1位新井 2位矢野?
- ・珍長…1位高木さん(23期) 2位橋口
- ・タックル…1位・2位(該当者ナシ)
- ・ケンカ…1位矢野 2位以下(該当者ナシ)
- ・シゴかれた…1位山崎 2位橋口

(第 24 期
同期生からのことば)

夫婦でテニス、家族でスキーとスポーツ大好き人間を続けています。
原点は千歳ラグビー部の苦しく楽しかった練習です。

伊藤茂美